

資 料

わが国初の自閉症成人施設「あさけ学園」の設立経緯

—「思想」をその分析視点として—

中 山 忠 政*・津 曲 裕 次**

本稿は、わが国初の自閉症成人施設である「あさけ学園」の設立までの経緯を検証することを目的とした。1981年6月、あさけ学園は、三重県菰野町に開所した。設立の中心となったのは、三重県津市の自閉症児療育施設「あすなろ学園」で療育を受けていた子どもの保護者らであった。保護者らは、設立準備会結成までに、以下の施設設立と運営に関する基本理念をもつに至る。(1)地域との連帯 (2)自主的生活 (3)労働を通して (4)障害に対する配慮 (5)社会に対する問いかけ。これらの基本理念には、あすなろ学園での年長児に対する療育思想および自閉症療育体系構想が大きく関与していた。

キー・ワード：施設 自閉症 設立経緯

I. 問題の所在

わが国において、自閉症の第一症例が報告されてから、約半世紀の歳月が過ぎ去ろうとしている。自閉症は、「遅れてでてきた障害」として、社会のさまざまな施策からも疎外された結果、社会問題化した。それ故、自閉症問題は、従来の施策の限界や処遇形態の矛盾を明らかにしてきたといえる¹⁴⁾。

ところで、「精神薄弱者施設史研究会」による一連の知的障害施設を対象とする研究は、施設史研究の「有効性」と、独自の分析方法を示してきたといえる²¹⁾。それらの研究は、「社会福祉施設史研究への発展を予想²⁰⁾」しながらも、他の障害種別の施設史研究には至っていない。

そこで、本研究は、これら施設史研究の示した枠組みにもとづき、わが国において初めての自閉症成人施設¹⁾であり、その後続々と設置されることとなる自閉症成人施設の施設づくりに

大きな影響を与えたと考えられる「あさけ学園」の設立の経緯について検証し、自閉症成人施設問題の成立過程を明らかにすることを目的とする。

II. 方 法

知的障害施設史研究は、その知見として、「思想」、「対象」、「方法・技術」、「建築計画」、「財政・運営」、「地域・社会」、「従事者」の8つの分析視点を、その方法として示してきた²⁰⁾。また、その成果として、例えば、わが国初精神薄弱児施設である「滝乃川学園」に関して、創始者の生涯と思想、施設での教育精神などの「思想」の側面を明らかにしてきたといえる²²⁾。

本研究は、上述の知的障害施設史研究の成果を踏まえ、基本的には、設立の経緯の背景や理念などの、「思想」にその分析視点をおくものとする。

史・資料は、設立趣意書や会合の記録、書簡、建築図面等を用いた他、関係者からの聞き取り²⁾も行った。

*心身障害学研究科

**心身障害学系

Table 1 あさけ学園の設立まで

| | | |
|-------|-----|-----------------------|
| 1977年 | 1月 | 社会福祉法人設立準備会結成 |
| 1978年 | 1月 | 趣意書作成 諸活動を本格的に開始する |
| 1979年 | 2月 | 現所在地との借地契約締結 |
| 1980年 | 8月 | 社会福祉法人設立申請 |
| | 9月 | 社会福祉法人設立認可 |
| | 10月 | 準備会が発起人会に移行する |
| | 11月 | 施設建設着工 |
| 1981年 | 5月 | 竣工式 |
| | 6月 | 正式開所 |

III. 保護者らの活動の分析

1. 設立準備会結成の経緯

「あさけ学園」は、わが国で初の自閉症成人施設として、1981年6月、三重県菰野町に開設された。

その中心となったのは、三重県津市の自閉症児療育施設「あすなろ学園」(IVの項参照)で療育を受けていた子どもを持つ保護者らであった。

開所後、保護者らは当時を振り返り、「なぜ親が施設をつくったのか」という理由について、以下のように述べている⁶⁾。

1) 障害があるとはいえ、成人になりつつある我が子に、大人としてふさわしい生活を送らせたいという親としての願い。

2) 法的にも、他の障害グループからも取り残された自閉症処遇問題への認識。

3) 既存施設では自閉症が処遇困難とされ排除される傾向にあるなど、既存施設の限界と自閉症独自の施設の必要性に対する認識。

聞き取り²⁾等によれば、児童施設であるあすなろ学園では、すでに「年長児」といわれる年齢に達し、その他の病院や施設に移るため退園する者もいた^{2,5)}。退園を間近に控えた保護者らは、それら「先輩」達の、自閉症専門ではない施設では理解されないという状況を目の当たりにして、あすなろ学園退園後の受け皿の必要性を強く感じた。

このように、保護者らの「施設づくり」の活

動は、あすなろ学園退園後や「親なき後」の保護者としての不安を背景とし、自閉症児療育施設「あすなろ学園」における療育を継続すべく「受け皿」づくりを目指したものであったといえる。

2. 基本理念

全国8都道府県にまたがる17家族により「社会福祉法人檜の里・設立準備会」が、1977年1月に結成された。それまでの間、保護者らは、以下の施設設立と運営に関する基本理念⁶⁾を持つに至った。

1) 地域との連帯

地域との連携を深め、入所者は地域の一人として、生産的で生きがいのある生活を保つことを施設運営の基本とする。

2) 自主的生活

単に保護するだけではなく、彼らなりに社会の一員として自主自立を目指し、豊かな人生を生き抜くよう援助する場とする。

3) 労働を通して

労働のよろこびや苦しみを感じ、地域の人々との交流を通じ、現実的思考や行動を身につけていく。

4) 障害に対する配慮

自閉症特有の障害に対して、医学的アプローチならびに個別的に配慮された指導プログラムを行う。

5) 社会に対する問いかけ

障害をもつ人達の存在は、人間の生き方とその連帯のあり方に対する問いかけであり、この問いかけに対する止むに止まれぬ一つの答えとして施設建設を決意するに至る。

これらの基本理念は、設立以降の実践や土地探しの過程において、その継承と実現がなされ、その背景としての思想には、後述のあすなろ学園・十亀史郎医師の影響をみることが出来る。

3. 施設計画

全くの「素人」であった保護者らは、厚生省発行の「法人設立の手引き」をよりどころに、資金集めや行政への陳情、法人許可申請のための交渉、啓発活動、書類づくり等、法人設立の

ための諸活動に奔走し、この間、保護者らは、月一回の全体会をはじめ、役割分担に応じた緊急の会合等をもった²⁾。

1) 土地探し

保護者らは、準備会結成後、まず土地探しに着手した。土地選考の条件としては、地域との交流が望めること、地域での生産活動ができること等、「自分が住むとしたら(バス停や住宅地、商店、働く場所が近くにあること)²⁾」がその基準とされた。最終的に、保護者らが見学を行った箇所は20ヶ所を越え、現所在地との借地契約締結を終えるまでに2年の歳月を要した。現所在地は、新興住宅地と隣接し、地場産業としての窯業が盛んな地域でもあり、その基準は満たされているといえる。

2) 資金計画

資金集めは難航し、社会福祉事業援助団体等からの補助金を得ることが出来たものの、総建築事業費の約半分は、出資金や借入金のかたちで保護者らの負担となった⁶⁾。

3) 建築計画

施設設計は、あすなろ学園年長児病棟に調査の目的で関わりのあった、当時の愛知工業大学講師・林 章氏に依頼された。林氏の「自閉症には、自己完結する農家の暮らしが適している」という考えにもとづき、居住棟には、上がりかまちのある土間風の作業室や座敷風の居間を配すなど当時としては斬新な設計がなされた。

IV. 十亀医師の与えた影響の分析

「あさけ学園」の設立やその理念には、あすなろ学園・十亀史郎医師の与えた思想的影響をみることが出来る。続いて、十亀医師を中心とするあすなろ学園における自閉症療育と構想について検討していくこととする。

1) あすなろ学園と十亀医師

あすなろ学園は、1964年、高茶屋病院児童病棟として発足し、現在、三重県立小児心療センターあすなろ学園として分離・独立を果たしている。発足当時、「児童の精神科入院治療施設は、全国に2、3ヶ所¹³⁾」程度であったものの、十亀医師は、児童専門の施設の必要性や「生活全体

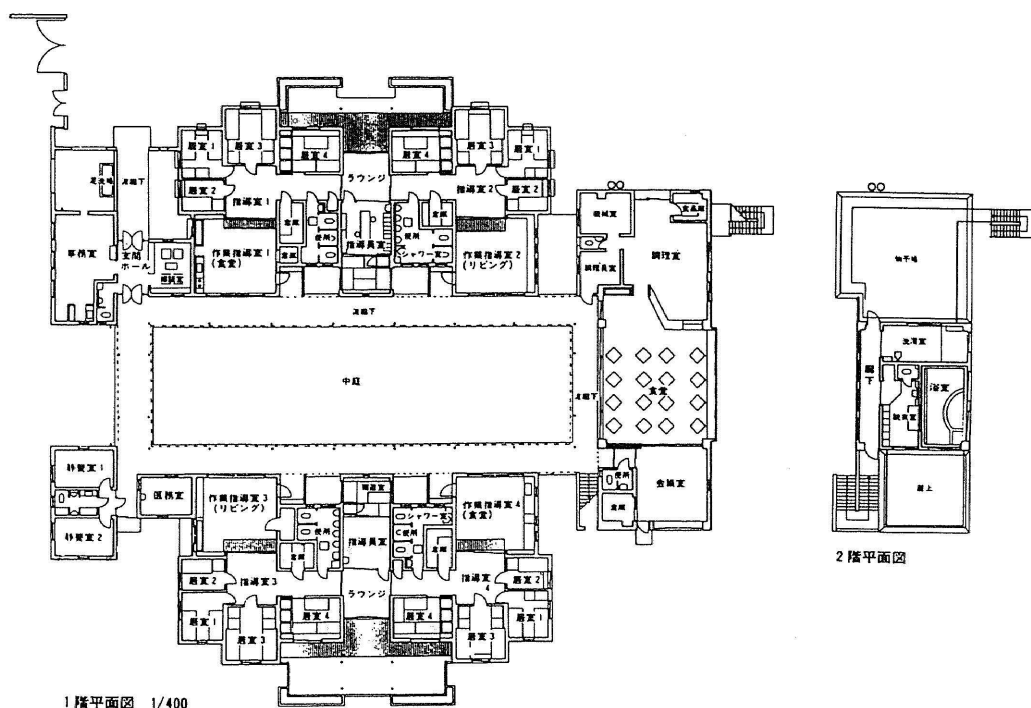


Fig. 1 あさけ学園平面図 (当時)

を治療の場とする¹³⁾」視点から、高茶屋病院内に児童病棟を創設し、自閉症療育の可能性を示すべく自閉症療育を開始したといえる¹⁶⁾。

2) 自閉症療育観

十亀医師を中心とするあすなろ学園における自閉症療育の実践には、いくつかの特徴とあさけ学園の設立やその後の実践に与えた療育思想を見出すことが出来る。

あすなろ学園では、教育権の保障のもと、「あすなろ方式」として知られる、医療と学校教育との連携が行われている。あすなろ学園では、文部省の情緒障害教育実験学校指定を受け、1968年には、わが国初の情緒障害学級ともいわれる「あすなろ分校」を発足させた。これは、十亀医師の「医療と教育は車の両輪である。どちらがかけても前進できない¹²⁾」という、教育を重視する考えにもとづくものであった。

年長児の療育に関しても、十亀医師は、早期から指導を開始し、1984年には年長児病棟を開設するなど熱心に取り組んだ。また、十亀医師は、年長児の特長として、「自閉性の軽減や応答能力の増加」、「感情的反応の増加」、「学習における進歩」をあげ、「必要な時期」に「集中的な治療」がなされれば、改善がみられることを示唆している¹⁹⁾。

3) 成人施設構想

十亀医師は、あすなろ学園開設初期から、「年長児にはどうしてもしなければならない計画がある⁷⁾」と述べるなど、成人施設の構想をあたためていたようである。

ところで、十亀医師は、保護者らの施設づくりの活動を側面から支えていたといえ、なぜ自ら施設づくりの主体とならなかったのだろうか。施設づくりが本格化し始めたころの会合で、保護者らを前に、十亀医師は、「やはり自分達で自前のものをつくったほうがよい」、「イメージとしては、ごく普通の生活が出来る所であることが望ましい」と述べている⁷⁾。この発言に、保護者らを中心とする施設づくりの活動に対する、十亀医師の姿勢をみることが出来る。十亀医師は、子どもに最も近いところにいる親を、

強力な治療者であると考え、成人療育の成否は、共同治療者として親の力がその「分かれ道」であるとしていた²⁾。つまり、施設づくりに関しても、親のもつ治療者としての役割に期待し、保護者らを支え、援助する役割にとどまっていたと考えられる。一方、施設づくりに関して、十亀医師は、あすなろ学園に「成人部(成人病棟)」をつくるという案には反対で、病院は「生活の場」ではないと述べている²⁾。十亀医師は、成人療育の場に関して、なるべく通常の生活に近い環境の中で生活を送らせたいという考えにもとづいて、保護者らを援助していたといえる。

4) 保護者へ与えた影響

ある保護者が「親もまた先生に育てられた²⁾」と述懐するように、十亀医師の「かわいがられ、命令ばかり受ける障害者ではなく、自分の力で生き抜く、自立する障害者を育てたい」という障害者観は、運動の中心となった保護者らに大きな影響を与え、あさけ学園設立の理念の中核的な思想として反映されている。

十亀医師は、施設づくりに関する保護者らとの会合で、成人施設に関して、

- 1 生きる喜びのある生活を送れる場所の必要性、
 - 2 身辺の自立のための「支え」と学習の機会の必要性、
 - 3 社会的理解にもとづく他の社会とのつながりの必要性、
 - 4 医療的な支えの必要性、
- を強調し、施設の規模は大きくないこと、場所は山地ではないこと、他の障害のある者も入所させることの、3点を施設づくりの基本として示した⁷⁾。この点は、前述のように、保護者らの活動の基本として、反映されている。

VI. 考察と残された課題

本研究は、「あさけ学園」の設立経緯に関して、「思想」の観点から検討を加えたものである。

保護者らを中心とした活動の分析において、保護者らは、既存の施設では自閉症は理解されないという認識を背景に、あすなろ学園での療

育の継続化を目指し、自閉症に適した処遇の場を求め、施設づくりの活動を開始したといえる。

また、十亀医師の与えた影響の分析においては、十亀医師は、あすなろ学園での年長児療育を基盤とし、「成人にふさわしい生活の場」を創造すべく、共同治療者としての親の力に期待し、保護者らの活動を支援していたといえる。

本研究は、自閉症成人施設問題の成立過程を明らかにすることをその一つの目的としていた。全国自閉症者施設連絡協議会の調査²³⁾によれば、加盟施設が設立を思い立った理由として、「既存の知的障害施設への不満」や「適切な訓練・援助の場の提供」という、自閉性障害に適した処遇を求めて設立に至った施設が過半数(27 施設中 16 施設)に達している。

また、奥野・近藤・千種(1988¹⁴⁾)は、自閉症成人施設設置の形態として、

- 1) 親や親の会が中心となって設立した施設、
- 2) 既存法人が設置した施設、
- 3) 親の会の運動等により、行政が設置した施設、

の3類型を指摘し、実際その多く(奥野ら¹⁴⁾)によれば、14 施設中 8 施設、1988 年現在)が、1)の親や親の会を中心に設立されている。このように、「あさけ学園」の設立の理由や形態は、他の自閉症成人施設のそれと性格を同じくするものであるといえる。つまり、自閉症成人施設の先駆けとして設立された「あさけ学園」は、その後設置される成人施設に、保護者らを中心とした成人処遇問題への対応の一つのかたちとして、またそのあり方として、影響を与えていたと考えられる。

これまでみてきたように、「あさけ学園」の設立における最大の特徴は、あすなろ学園十亀医師の関与であったといえる。自閉症成人施設の設立に医師が関与した例は希なものであり、その思想は、「あさけ学園」の設立理念に大きな影響を与えていた。これまで関係者により「あさけ学園」における 10 数年にわたる療育実践の報告^{11,15)}がなされ、強度行動障害の激しい事例や、問題行動が頻発した高機能自閉症の事例な

どの改善例¹⁵⁾が示されている。その療育実践の背景には、「『大人として』育てる」という、十亀医師の自閉症療育に対する理念の実践を感じることが出来る。自閉症は、未だ原因や療育方法が未確定であり、その療育実践には、背景となる障害者観や人間観が大きな影響を与えたといえる。今後は、設立以降の「あさけ学園」の実践の検討とともに、設立の経緯に関しても、「思想」以外の幅広い分析視点からの検討が求められているといえる。

〈付記〉

本稿の要旨は、日本社会福祉学会第 45 回全国大会で報告した。

本研究を進めるにあたり、ご協力頂きました、社会福祉法人檜の里理事長石丸晃子氏をはじめ、関係者の皆様にお礼申し上げます。

注および文献

- 1) 「自閉症成人施設」は、法的には、精神薄弱者福祉法にもとづく精神薄弱者援護施設として運営がなされている。なお、全国自閉症者施設協議会に加盟の自閉症施設は、現在 34 施設にのぼる。
- 2) 聞き取りは、発起人の一人で、社会福祉法人檜の里理事長・石丸晃子氏より、1997 年 3 月 17 日と 7 月 7 日の 2 回にわたり行われたものである。
- 3) 林 章(1982): 自閉症施設あさけ学園。建築文化, 427, 109-118.
- 4) 林 章(1987): 自閉症者施設の建築計画的研究—自閉症者とその生活環境とのかかわり—。博士論文(東京大学)。
- 5) 石丸晃子(1974): 朝明けの日。いとしご, 16, 20-24.
- 6) 石丸晃子・君和田史枝(1981): あさけ学園を設立して。檜の里後援会。
- 7) 石丸晃子他(1986): あさけ学園の夜明け前。十亀史郎追悼集, 275-278.
- 8) 石丸晃子他(1986): 年長児クラブ—年長児指導。十亀史郎追悼集, 168-173.
- 9) 石坂和子他(1986): あすなろ学園の初期。十亀史郎追悼集, 35-41.

- 10) 君和田史枝 (1986): 共同治療者として. 十亀史郎追悼集, 272-274.
- 11) 近藤裕彦 (1987): 青年・成人期になった自閉症児の療育と指導—あさけ学園における実践から—. 応用心理学研究, 12, 59-66.
- 12) 小石川直樹・小西眞行・早川聰美 (1986): あすなろ学園における学校教育. 十亀史郎追悼集, 115-118.
- 13) 室積己矩子・井上良純 (1988): あすなろ学園 23 年間の入院児について—入院治療の現状とあり方—. 児童青年精神医学とその近接領域, 29 (4), 204-214.
- 14) 奥野宏二・近藤裕彦・千種 錦 (1988): 自閉症成人施設の現状と課題, 児童青年精神医学とその近接領域, 29 (4), 215-230.
- 15) 奥野宏二・近藤裕彦・西野 公 (1996): 青年・成人期の自閉症における療育方法論. 児童青年精神医学とその近接領域, 37 (3), 254-271.
- 16) 十亀史郎 (1964): あすなろ学園紹介. 児童精神医学とその近接領域, 5 (2), 132-134.
- 17) 十亀史郎 (1968): あすなろ学園の軌跡. 十亀史郎追悼集, 32-34.
- 18) 十亀史郎 (1968): 「親たち」への手紙. 十亀史郎追悼集, 262-264.
- 19) 十亀史郎 (1978): 自閉症年長児の症状と治療について. 臨床精神医学, 7 (8), 59-65.
- 20) 津曲裕次 (1974): わが国の戦前の「精神薄弱」者施設の総合的研究VII. 日本社会福祉学会第 22 回大会発表要旨集, 79-84.
- 21) 津曲裕次 (1976): 我国の戦前の精神薄弱者施設の総合的研究IX—研究の成果と今後の課題, 日本社会福祉学会第 24 回大会抄録集, 48-49.
- 22) 津曲裕次・宇都栄子 (1973): 日本「精神薄弱」者施設史研究 II. 日本社会福祉学会第 21 回大会自由論題報告論文要旨集, 8-12.
- 23) 全国自閉症者施設連絡協議会 (1994): 自閉症者施設実態調査報告書.

Establishment of Asake Gakuen

Tadamasa NAKAYAMA and Yuji TSUMAGARI

This article aims to report on the details of establishment of Asake Gakuen. Asake Gakuen is first specialized facility for persons with autistic disorders. It was established by a group of parents in 1981. This group recognized the following policies about facility management ; (1) Association with the community (2) Voluntary life (3) Work as a medium for social training (4) Consideration for individual handicaps (5) Educational movement for the community. The thoughts mentioned above were influenced by the policy on which the therapeutic and systematic programs for children and adolescents with autistic disorders were based in Asunaro Gakuen.

Key Words : facility, autism, thoughts/details of establishment